

人間科学研究科長 殿

岸 俊行氏 博士学位申請論文審査報告書

岸 俊行氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱をうけ審査をしてきましたが、2006年11月24日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名： 岸 俊行
2. 論文題名： 連続的な授業観察から見出される授業構造の分析

3. 本文

3.1 本論文の主旨

本論文は、初等教育の現場を題材にして、日々の教育実践の中で繰り返し営まれている教授学習行動に内包されている各種の規則性、法則性を明らかにすることを目的とした論文である。そのために、特別な用意された授業ではない日常的な一斉授業を連続的に記録し、発言内容を独自のカテゴリーシステムによってコード化し、データベース化することによって統計的な処理を行った。その結果、これまで明らかになっていなかった教師の教授行動の硬さが、相関係数0.9以上の数値を持って具体的に示された。そしてこの硬さは結果的に授業全体の雰囲気の規定し、それが児童の学習行動に影響を及ぼしていることが示唆された。このことは、教師の教授行動が児童の多様性に対応しきれていない種々の結果から証明できるものである。

3.2 本論文の構成

本論文は以下の全7章から構成されている。

- 第1章 序論
- 第2章 先行研究
- 第3章 本論文の課題と目的
- 第4章 授業中の教師の行動に関する検討
- 第5章 一斉授業における雰囲気の検討
- 第6章 一斉授業における教師－児童の相互交渉の検討
- 第7章 総括

3.3 本論文の概要

第1章では、研究の背景と分析のための視点が述べられている。

第2章では、従来の授業研究を、教師の教授行動と授業の場を規定する授業の場全体の雰囲気 (climate) の二つの観点にしぼりまとめている。教師の授業内での言語的行動を明らかにする研究は、様々な手法で数多くなされているが、授業の雰囲気に関わる研究は少なく、その研究の

必要性を中心に論じられている。

第3章では、研究の目的と論文の構成について述べられている。

第4章では、授業中の教師と児童の言語的・非言語的行動を取り上げ、定量的に分析を行うことによって日々繰り返し行われる授業の中での教師の行動の検討を行っている。まず、授業中の教師・児童の発話に着目し、連続する授業間の相関分析を行い、さらに発話カテゴリーを基にしたクラスター分析を行っている。その結果、教師の日々の授業内発話の安定性（硬さ）を明らかにするとともに、教師の教授スタイルが4つの群に分けられることが報告されている。さらに授業中の教師の児童への指名行動に着目し、相関分析を行った結果、教師の指名行動にも教師の発話と同様に高い安定性（硬さ）があることが報告されている。また、このような非常に高い安定性（硬さ）を有している教師の教授行動が授業の雰囲気に影響を与えている可能性があることが言及されている。

第5章では、授業を客観的にはかる指標として雰囲気に着目し、授業雰囲気の検討を行っている。授業の雰囲気を評定する際に、本論文では教師と児童以外の第三者が、授業のビデオ記録を視聴してその授業の雰囲気を評定しているところに特徴がある。通常は当事者である教師もしくは児童による評定が一般に行われていた。まず予備調査として、明らかに異なる印象を与える同学年、同教科、同単元を教える異なる教師の授業ビデオ（各授業5時限）を実験素材にし、授業雰囲気の探索的検討を行っている。次に予備調査をもとに授業雰囲気尺度を作成し、尺度の信頼性・妥当性の検討を行っている。さらに、作成した尺度を使用した授業雰囲気評定を学生と現役教師に実施し、評価者による授業雰囲気の認知の差異の検討もなされている。これらの検討の結果、第三者による授業雰囲気の評定が、一定の信頼性と妥当性を有していることが報告されている。さらに、授業雰囲気の形成に教師の教授行動が関連していることが示され、また、授業雰囲気の認知に関しては、評定するものの価値観が影響を及ぼしており、現役の教師と学生とでは異なることも明らかにされている。

第6章では、授業内での教師の児童への関わりの特徴を、以下の三点につき数量的・解釈的分析を行うことによって明らかにしている。

第一は、教師の児童への働きかけの特徴を明らかにするために、小学校2年の1クラスを対象に、授業中の教師が用いる児童への「指示・確認」の特徴を検討している。その結果、教師は「指示・確認」を多用することにより、児童との相互交渉の中で、授業自体をコントロールし、また、教師の発言に強制的意味合いを付与している可能性が示されている。

第二は、教師の児童への評価に関して、教師の児童へのフィードバックの現状を数量的分析により明らかにしている。その結果、教師は一斉授業の中では、結果の正否のみの伝達が殆どであり、その正否の伝え方に差異があることが明らかにされている。

第三は、一斉授業の中の児童の予想外応答場面に着目して、予想外応答場面における教師の児童へのフィードバックの特徴を検討している。その際に、教師のフィードバックを児童への影響という観点からカテゴリーに分類し数量的分析を行うとともに、特徴的な事例を取り上げて解釈的分析を行っている。その結果、数は決して多くはないものの、授業時間の制約等の物理的要因により、教師は児童にマイナスの影響を及ぼす可能性のあるフィードバックをする場合があることが言及されている。

第7章では、研究成果が総括されている。

日々の授業の中での教師の教授行動は、非常に高い安定性を有しており、この高い安定性が

日々の授業に現れてくることが示唆されている。この教師の有する教授行動の非常に高い安定性は教師の硬さと捉えることができ、この硬い教授行動が、授業の雰囲気に影響を与え、さらには、多様な児童の応答に対するステレオタイプのフィードバックとして、児童にも影響を及ぼしている。

3.4 本論文の評価

本論文は、小学校で行われている一斉授業を連続的に観察したデータをもとに、実際に教育現場で行われている日々の授業の構造を明らかにしたものである。従来の授業研究は授業を改善するために、1時限の授業を記録し、分析し、評価を行っていた。しかし本研究の眼目は、毎日繰り返される授業の中で一貫して表れてくる授業の構造に注目することにあった。日々繰り返される授業はどのような規則性を持ち、そしてそれが、どのように児童・生徒の学習行動に影響を与えているのかを明らかにすることを目的とした実践的研究である。その成果として、大きく以下の2点を評価したい。

1) 教育実践に内包される内部構造を独自のカテゴリーシステムを用いた分析から「教師行動の硬さ」として取り出した研究は類を見ない。主観的な記述としての硬さが表現されることはあっても、具体的な数値を伴って明らかにされた研究は始めてである。

2) 教育研究の一つに学級風土の研究がある。これは、古くから数多くの研究がなされている。しかし、授業に限定してこの雰囲気を研究テーマとして持ち込んだ例はない。本論文において、問題としているテーマの一つは、教師と児童・生徒の相互作用において形成される授業の雰囲気にある。個々の行動的要素からは説明できない、しかし、授業全体を特徴付けている雰囲気には明らかな相違がある。これは、独自の評価尺度を開発し、これを第三者に適用することによって検証されている。部分の総和としては表現できない明らかな差異が、第三者に評定を求めることによって確認できた。

以上より、博士学位申請論文審査委員会は、本論文が博士（人間科学）を授与するに十分値すると判断した。

3.5 本論文の前提となった学術論文誌

本論文の前提となった学術論文誌の本人を第一著者とする原著論文は、以下の通りであった。

1. 岸俊行, 塚田裕恵, 野嶋栄一郎: 2004 ノーとテイキングの有無と事後テストの得点との関連分析. 日本教育工学会論文誌, 28(suppl.), 265-268.
2. 岸俊行, 野嶋栄一郎: 2006 小学校国語科授業における教師発話・児童発話に基づく授業実践の構造分析. 教育心理学研究, 54 (3), 322-333.
3. 岸俊行, 野嶋栄一郎: 2006 小学校国語科の一斉授業における雰囲気の研究. 人間科学研究, 19 (2), 75-84

4. 岸 俊行氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学	教授	博士（人間科学）	（大阪大学）	野嶋 栄一郎	印
審査員	早稲田大学	教授	文学博士	（東京大学）	中島 義明	
審査員	早稲田大学	教授	博士（人間科学）	（早稲田大学）	齋藤 美穂	
審査員	東京工業大学	教授	工学博士	（東京工業大学）	赤堀 侃司	